

真夜中の電話

～到津伸子回顧展に寄せて～

真夜中に電話のベルが鳴る。到津さんからだ。

「どう、隆くんは元気？」

開口一番は、大抵この言葉から。私の息子への気遣いは、シングルマザーの私への思いやりからだったと思う。

到津さんは、穏やかでクールな声音の持ち主。彼女の語り口は耳に心地よく、かつて好んで聞いていたシャンソン歌手バルバラを思い起こさせる。神秘的でニュアンスに富んだ声だと、私はその発見をひとり密かに愉しんでいた。

その声の持ち主が、「明石の焼き穴子って、すごく美味しい。同じ穴子をデパートへ買いに行ったのだけど、売ってなくて…。」と電話をかけてきたのだ。

ちょうど、後に大作となる作品に没頭していた到津さんに、陣中見舞いのつもりで送った明石の老舗の焼き穴子が届いた頃だろうか。

「フフッ」と彼女が電話の向こう側で低く笑った。この含み笑いはくせものだ。

「デパ地下の食品売り場のあちこちで買い物したあと、帰ろうとして、忘れ物に気がついて。パリで買ったお気に入りのサングラスだったので、立ち寄った売り場をすべて捜して回ったけど見つからなくて…」

「エエッ、それはたいへん。」

見つかったら連絡してもらえるように手続きしたのかと問う私に彼女はこう続けた。

「実は、うちに帰って、玄関の壁の鏡をひょいと見たら、見つけたのよ、

サングラスが自分のあたまの上に鎮座してるの。」

それから、彼女はもう一度「フフッ」と短く笑った。

私は、笑いを噛み殺して聞いているのに必死だったが、彼女はいつもの調子で淡々と続けた。

「それでね、私は売り場の人に、ちゃんと、紙にサングラスの形を描いて、フレームと眼鏡の色合いを説明したのに、売り場の方は、そのサングラスならご自分のあたまの上に掛かっていますよ、とは誰一人教えてくれないの。どう思う？」

と、訝しげに言った。

「それって、意地悪からじゃないと思うよ。あたまに掛かっているサングラスとは別

の、もうひとつを捜していると思ったんじゃないかな」と応じた私だったが、

堪えていた可笑しさが弾けて、私はクククと身をよじらせて笑ってしまった。

そして彼女も、もう一度フフッと笑ったのだった。

いつも一時間以上は喋った。到津さんからの電話が鳴るのはいつだってそう、

眠れぬ日の真夜中のことだった。

エッセイ『不眠の都市』からも伺えるように、光と闇について鋭い考察力をもつ彼女は、谷崎潤一郎の随筆『陰影礼讃』について語り合った事もあった。ある時は池田満寿夫が作った映画『エーゲ海に捧ぐ』に出演したときのこと、パリで高倉健と出会ったときのこと、同じくパリで中上健次と酒を交わしたことなど、彼女は思い出すままに、興味深い話をしてくれた。

また、ある時は身近で感じる日本異変について。住まいの近くの桜の樹が切り払われたことをとても残念がり、世間との美意識のギャップを嘆きもした。

話は尽きなかったが、いつも耳に当てている受話器を持つ手が疲れ、気付けば午前3時になっていた。

私たちは学生時代に戻ったかのように、デカダンな気分を愉しんだ。

書こうとしていた小説の構想を聞かされた日もあれば、小説の題名について、二、三、候補を挙げて、どれがいいと思うかを訊かれたので、「遥かなる東京」を推したなんてこともあった。

無責任な会話を楽しみながら、時折、核心に触れるような話をしたりした。

あたまの上のサングラスは忘れるくせに、小説家としての到津伸子は、
自らが納得できるまでは、決して筆を置かない完璧主義者であった。

そして10年もの歳月が過ぎようとしていた頃、彼女はやっとその筆を置いたのだ。
命を燃やして書き上げた原稿を遺して、彼女はひとり光彩の彼方へ旅立った。

到津伸子の絶筆となった『遥かなる東京』は、本としての体裁を調べてこの世に生まれなければならぬ。

本として出版されたとき、到津伸子の物語は初めて完結する。

彼女の絵画のような絶妙な光と影のニュアンスは、一冊の本となり、ひとり歩きを始める。やがて津々浦々、最後の旅にでるだろう。

到津さんと最期の電話となったのは、2018年、年の瀬の宵の口だった。私は急用で手が離せないことがあって、夜中にまたかけてね、と言ってしまった。到津さんとは、いつもの真夜中の電話で何にも邪魔されることなく、ゆっくりと会話を楽しめたかったのだ。

しかし、彼女からの電話のベルが鳴ることはなかった。

私はずっと日のことを後悔していた。

その次にかかった電話は、中山さんからの到津伸子の訃報であった。

私は、ご免なさいと何度となく呟いて泣いていた。

すると、息子が、「母さん違うだろう。ご免なさいではなく、有り難うと感謝しなくては。」と言った。

私はピシャリとした息子の言葉にハッとさせられた。

真夜中の電話はいつだって愉しかったし、なんとも贅沢な時間であった。

私は自身が思うよりずっと、あなたに感謝しなければならないのです。

到津さん、本当に有り難うございます。

私は、未だあなたの携帯番号をアドレス帳から消すことができません。

まだまだ繋がっていたいから。

今度は私がそちらに行ったときは、私から電話をお掛けしますね。

いつもの時間、真夜中に。きっと長い長い電話となることでしょう。

そちらでは、夜更けを気にする必要なんかありませんから。